病膏肓に入る　解答

A　語句の意味と読み

(1) 病気が重くなること（重い病気になること）。「疾」は病気そのもの、「病」はその病気が重くなることを表す。 ／★「公の病気が重くなった」が話の出発点。ただの「病気になった」より重い

(2) 治療する（病気を治す）。 ／★古い注釈にも「為は治のごとし」とある。この文章の「為」は「をさむ（治療する）・なる・なす」と読み分ける

(3) 子ども・こぞう。 ／『史記』鴻門の会の「豎子与（とも）に謀るに足らず」では、人をののしる「こぞう」の意味で使われる

(4) 膏＝心臓の下の部分／肓＝横隔膜の上の部分。どちらも体の奥深くの、治療が届きにくいところ。 ／古い注釈には「肓は鬲（＝横隔膜）なり。心の下を膏と為す」とあり、説明は本によって少しちがう。お使いの教科書に合わせること

(5) こうこう／「肓（コウ）」を、形のよく似た「盲（モウ）」と見まちがえた読みだから。 ／★歴史的仮名遣いでは「かうくわう」。「肓」の下は「月（にくづき＝体の部分）」、「盲」の下は「目」

(6) 「攻」＝お灸など、火を使う治療／「達」＝鍼（はり）を刺して病気のところまで届かせる治療。 ／古い注釈に「達は針なり」とあり、「攻」も「熨灸（火を使う治療）」と説明される。この二つに「薬」を加えた三つの治療法が、どれも届かないという流れ

B　句法

(7) 置き字。「秦に」の「に」にあたり、動作の向かう先（場所・相手）を示す。書き下し文では読まず、送り仮名の「に」で表す。 ／「于」を「於」と書く本もある。どちらも同じ置き字

(8) 使役。「Aに Bさせる」の意味。ここは「医緩に（景公の病気を）治療させる」。 ／★「使」は助動詞「しむ」にあたるので、書き下し文ではひらがなで書く。「Aをして」の「をして」を落とさない

(9) 再読文字。「いまだ〜ず」と読み、「まだ〜ない」の意。ここは「（医緩が）まだ到着しないうちに」。 ／★一度目は副詞「いまだ」、二度目は打消の助動詞「ず」。ここは下に「に」が続くので「ざる」の形

(10) ⑦の「焉」は「いづくにか」と読み、「どこに・どこへ」と場所をたずねる疑問の語。⑬の文末の「焉」は置き字で、書き下し文では読まない（文を言い切る気持ちを添える。「そこには」の意味を含むと説明されることもある）。 ／★同じ字でも、動詞の上にあれば疑問・反語、文の終わりにあれば置き字。⑦は、もう一人が答えを言っているので反語ではなく疑問

(11) 「Aを若何（いかん）せん」と読み、「Aをどうしようか／Aをどうすることができようか（いや、どうにもできない）」の意。ここは反語。 ／★「若何・如何（いかん）」＝どうするか（方法）。「何如（いかん）」＝どうであるか（様子）。字の順番で見分ける

(12) 「〜べからず」と読み、ここでは「〜できない（不可能）」の意。「病気は治療することができない」。「也」は「なり」と読み、断定を表す。 ／「不可〜」は「〜してはならない（禁止）」にもなる。ここは医者の診断なので「できない」。「也」はこの文章に四回出てくる

C　主語・指す内容

(13) 主語＝秦伯（秦の国の君主）／「之」＝景公（景公の病気）。 ／★医者を求めたのは景公、医者を送ったのは秦伯。二人を取りちがえない

(14) 医緩。 ／秦から晋へ向かっている途中。そのあいだに景公が夢を見る

(15) どちらも医緩。 ／話しているのは病気が化けた豎子。「あの医者からどこへ逃げようか」と相談している

(16) 二人の豎子＝景公の体にいる病気そのもの。 ／★景公のことではない。「我」は話し手である病気の化身たち

(17) 主語＝景公／二つの「之」はどちらも医緩。 ／「之が礼を為す」＝医緩のためにお礼をする。「之を帰す」＝医緩を（秦へ）帰す

D　口語訳

(18) （医緩が）まだ到着しないうちに、景公は夢を見た。（夢の中で）病気が二人の子どもの姿になって言うことには、

(19) あれは腕のよい医者だ。（あいつが）私たちを傷めつけるのではないかと心配だ。どこへ（あいつから）逃げたらよいだろうか。

(20) 肓の上、膏の下にいれば、（あの医者だって）私たちをどうすることができようか、いや、どうにもできはしない。 ／★「居らば」は未然形＋「ば」で仮定（もし〜にいるならば）。「若何せん」は反語なので「いや、〜ない」まで訳す

(21) お灸で（病気を）攻めることもできず、鍼を（病気のところまで）届かせようとしても届かず、薬もそこまでは届きません。

病膏肓に入る　解答／現代語訳

E　内容・記述

(22) 正体は景公の病気（病気が人の姿になったもの）。夢の中で病気たちが「肓の上、膏の下」に隠れると話しており、あとで到着した医緩が、診察してそれと同じ場所を言い当てる。夢の場面は、その診断の確かさをきわだたせる前ぶれになっている。

(23) 病気が肓の上、膏の下という体の奥にあり、灸も鍼も薬も届かないから。（三十三字） ／医緩自身が直後に「肓の上、膏の下に在り」「攻むるも可ならず…薬至らず」と理由を述べている

(24) 夢で病気たちが話していた隠れ場所「肓の上、膏の下」を、医緩が診察で正しく言い当てたから。（四十四字） ／★本文に理由は直接書かれていない。夢の中の言葉と医緩の診断が同じであることから読み取る

(25) 病気は治してもらえなかったが、医緩の見立ての正しさを認めて敬意をもち、手厚くお礼のもてなしをしてから秦へ帰らせた、という態度。

F　文学史・故事

(26) 一つめ＝病気が重くなって、治る見込みがなくなること。二つめ＝物事に熱中しすぎて、どうにも手がつけられなくなること。 ／★読みは「やまいこうこうにいる」。今の日本語では、二つめの「熱中しすぎる」意味でもよく使われる

(27) 『春秋左氏伝（左伝）』。魯の国の歴史書『春秋』に、くわしい出来事をおぎなった注釈書（伝）で、左丘明の作と伝えられる。成公十年の記事。 ／『春秋』の注釈書には、ほかに『公羊伝』『穀梁伝』がある（あわせて春秋三伝）

(28) 二豎（にじゅ）。（「二竪」とも書く）

【現代語訳（全文）】

晋の景公の病気が重くなった。（景公は）医者を秦の国に求めた。秦伯（秦の君主）は、名医の緩に（景公の病気を）治療させることにした。（医緩が）まだ到着しないうちに、景公は夢を見た。（夢の中で）病気が二人の子どもの姿になって、（一人が）言うには、「あれは腕のよい医者だ。（あいつが）私たちを傷めつけるのではないかと心配だ。どこへ（あいつから）逃げたらよいだろうか。」と。そのうちのもう一人が言うには、「肓の上、膏の下（のすきま）にいれば、（あの医者だって）私たちをどうすることができようか、いや、どうにもできはしない。」と。

医者（緩）が到着して言うには、「この病気は治療することができません。（病は）肓の上、膏の下にあります。お灸で攻めることもできず、鍼を届かせようとしても届かず、薬もそこまでは届きません。治療することはできないのです。」と。景公は「（まことに）腕のよい医者だ。」と言った。（そして）手厚くお礼のもてなしをして、（医緩を秦へ）帰した。

▸ 漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/kanbun-sankousho/　　▸ 解説記事にもどる